

# 眞 生

第八卷 第六號

### ○僅かの距り

たゞい千里の距りも、それが同じ方向であるさきには二人はいつか遇ふさきがある。けれどもそれが若し反對であるならば、恐くはまた永久に遇ふさきは無い。これ時代の錯誤、新舊思想の相違である。

### ○凡夫の淨土

我々が單に想象した淨土といふものはそれは凡夫の經驗によつて想像せられた幻影に過ぎない。従て、そんな淨土は眞實の淨土ではない。

### ○眞人の世界

之に反して、眞に解脱を得た人の淨土はそのまゝ、が體驗の世界であり、佛の世界である、それは全く單なる想象の淨土ではない。而もそれは過去にも通じ、未來にも通ずる現在常住の涅槃でもある。

### ○馬鹿の語

馬鹿な者には馬鹿な話があるのだ。馬鹿の前には眞人の叫びは判らない。それが判るなら、それは馬鹿ではないのである。

昔から馬の耳に念佛さか云ふが、恐らくは此の事を云つた言葉であらう。

それと同じく、眞人の前にはまた馬鹿な話が聞えぬものだ。それが聞えるやうではそれは眞人ではないからである。

### ○自分の味方

「自分の味方が他から罵られるのを聞いて、腹も立たないのは自分がまた眞にその人の味方でないからである」とかかつて弁樂上人から聞いたことがあるが、今にして思へば思ひあたる事が甚だ多い。

今さきの人々で道を聞くのは之位の人々が多いではないか。少なくとも我等の同士にはこんな人はありたくないものだ。(念)

# 自 信 心

## 目 次

「生」	
自信がない	尅 子
父の命日	土屋観道
別時三昧會希望	中村辨康
生存の意義	石黒武夫
遇感一二	土屋道観
吾朋便り	

## 「生」

□ 水は滾々として地より湧き、陽は燦々として天より輝き、森羅萬象、悉く私人を抱いて上から下からと育て、ゐて下さる。生き活きてゆく天地の力が此の私の上にも現はれて一つの華となつてゐるのです。私は天地を呼吸して生きてゐるのでした。天地は私一人を生かすが爲めに總懸りになつて働いてゐるのでした。

□ 「私の生」はこんな重大な深味のあるものでした。私が一歩前へ踏み出すのも、私が一歩後へ退くのも悉く、此の天地と終始するのであり、私の生そのものが、「天地の生」になつて、永遠に進化發展するのでした。此の「生」を觀じ、此の「生」を生きることが本當の人生であり、宗教であると思ひます。藝術も此「生」を生きてゐるのであり、教育も此の「生」に生きてゐるのであり、哲學も道德も政治も經濟も、此の「生」に徹した時、眞實の價値を體現したのであり、眞實の行政、律法、眞理、藝術品を創造するのでした。

□ 此の「生」を自ら味ふのでなくて、何の政談演説でせう、何の貯蓄、何の眞理、何の作品でせう、「自己」を生かすことなくして徒らに作品を弄つたり、生徒を弄つたり、金を弄つたり、政治を扱つたりしてゐるのです。皆それ等は玩具であり、自分自身をも浪費してゐるのでした。本當に此の「純一の世界」「生命の世界」を見出すことなくして何の生き甲斐でありませう。

□ 私達は「生」さいふこを抽象的、客觀的事象に概念化してつて、「生きて」居り乍ら、その「生」の實動を忘れてゐるのです。そして單純な生理活動、表面的欲望生活に没頭して「眞實の生活」そのものに深化せようとして居らぬのです。本當に惜しいことです。迂闊なことです。「一番大きい、一番手近な、一番尊い」ことを忘れて空の聲氣樓を逐つて走つてゐるような氣がします。(尅)

□ 皆、自分のやつてゐる事、やつて行く事に自信がない。

□ 自信がないのは、自分の仕事、自分のやり方に熱心が足りないからです。たとへ今の自分、今の自分の商賣に不十分な處があつても、何とかして旨くやつて行かう、やり遂げた積かぬさいふ決心と努力があれば、謙遜し乍らも強い自信がある譯けです。

□ 名古屋の愛知電鐵の運輸課長が、社内に「我こそは模範従業員だ」と名乗つて進み出れる者があるなら課長まで申告せよ」と傳達せられたそうです。其時多くの人はそんな馬鹿な人間があるものかと嗤つたが、果して二三人の者が直ちに現はれた、課長は之れに無條件で増俸して抜擢したと聞きました。「私こそは模範従業員だ」と名乗つて出る」ことは、辭職や自惚れては出来ることではありません。又今迄は模範従業員であつたと思へなくとも、今後は必ず自らなつてみせるさいふ自覚がなければ出来るものではありません。此の自覚が望みであり、望みは眞剣な努力となり、研究と努力は向上發展をさせます。此の向上發展することが本當に活きた信仰であります。

□ 斯ういふ風に自分の仕事、自分の商賣「自分」といふものをもつと長くせよ、長くせれると信じて努力せれる人は一番仕合せな人であります。それを家の奴等が間に合はぬと、世間が理解して呉れぬと云て當り散らし、自分のやり方の間違つてゐることを、下手な事を改めようと思へぬのは馬鹿の骨頂であります。そんな時に限つて神信心をしたり、佛信心をして旨く助けてもらはうなんかと考へてゐるが、そんなものは信心でも何でもありません。行詰りは唯一つ、自覚自信から拓けます。

□ 佛の力で救はれるのではなく、佛の力で往生するのでもありません。今迄の自分のやり方が煮え切らなだんぢ氣が附いて、これではいかぬ、「一ツ」を踏躓一番、斷崖を攀る覺悟で直すところに、局面は展開し、更生の曙光は赫々々輝いて来て、ズン／＼好轉して行くのです。此躓起一番、奪ひ立つところに今迄想像もせなかつた大働きが出来るので、「如来様のお恵みを頂いたからだ」と密々感謝せられるのであり、如来の他力が「我れ」となり、自分と如来様が一体になつて働かされて貰へる力の世界があります。省れば斯かる自覚を呼び起こして下さつたのも如来様であり、その自覚に到達する行詰りを生じさせて下さつたのも大慈悲であつたこと、一々悉くが恩寵として感謝せられその感謝は悉く將來への奉還と變つて勇み立つて行きます。(尅子)



# 父の命日

土屋 觀道

昭和四年五月二十四日、今日は亡父の十三年忌、丁度その命日に當つてゐます。今朝床の中で此のことに氣づいてから、私の心は急に當時のことが思ひ到つて、一層その當時のことが思ひ出されてな  
らぬのである。

私は思つた、「世に此ほどの悲しみが又とあらうか、もう私は父を亡くして孤兒なんだ、此の世と云ふ此の世に、私はもう永久に父を持たぬのだ、今日から私は永久に父よと呼ぶことの現實を持たぬ身となつたのだ、従つてまた、今日から私はどこを探しても、どこへ行つても、永久に、今までのやうに、父を此の世に見ることもできねば、父と此の世に語ることもできぬ身となつたのだ。お、父よ私はもうあなたには永久に御目にかゝることができぬのでありませうか、今までのやうに、私はもうあなたに手紙一本だつて、出すことができぬのでありませうか。昨日と云ふ昨日まで、あなたは此の世の人として、現實の人であつたのに、今日と云ふ今日はもうあなたは此の世の人ではあられなくなつたのか。」

今までだつて、人は必ず死ぬるときがある、だから私初め、私の父だつて、必ず死ぬるときがある

と云ふ位のことには私も知らないものではなかつた。乍然之を當時の父を亡くした實感から比ぶれば昔はまだ本當に父が亡くなるものだと云ふことは知らなかつた。生者必滅、會者定離などと云ふことは常に私共の聞くところである。乍然今から思へばそれがどこまで本當に私共に判つてゐたのであらう。多くの人はこれを人事のやうに覺へてゐるに過ぎないのである。従つて、自分の父が死ぬるとか、自分の母が死ぬるとか云ふことも、之を父母の生前にたゞさうと思ふのと、實際、目前に父母を亡くした事實に會つたのとはその感全く雲泥の相違である。否、それどころかそれは全く想象もつかぬ相違であります。

## 二

私が父を亡くした感じになつたのは父が亡くなるより、二三時間の前でした。而も、それが夢の報らせであつたと云ふことは私にとつては限りない一つの記念であります。そして、父が亡くなつた電報の報らせがあつたのは更にそれよりも十数時間の後でした。

當時、私は弁榮上人の御伴をして、滿鮮傳道に旅立つてゐた時でした。父と別れてまだ一月も立たぬ大正六年五月二十四日、私共が丁度朝鮮の兼二浦の教會所に宿つた朝の事でありました。

私がフト屋外を見ると父が家の外にウロついて居るのです。「お父さんどうしたのです」と云へば「お前を尋ねてゐたのだ」と云ふ。「私はここにゐるではありませんか」とその手をとつて老体をい  
たれば、父はもう子供のやうに半ば氣ももうせた有様で私に引かれて家の内に入りました。するともう父は全く氣絶しやうになつてゐたのです。これはと云ふので、私が父をかゝえて中家にあげて、私の膝の上にだきますと、もう靜に息を引きとりました。私の側に之を見てゐた、母と姉とは驚いてさ  
わがうとしますので、私は之を制して念佛をさせたのであります。が、父はまことに安かなる睡り

の如くその中に命終をしたのでありました。

いかに落付いてゐたとは云ふものゝ、私がそれによつて、いたく愁傷したかと云ふことは云ふまでもありません。然にその驚きと悲しみの爲めに、私は絶え入るやうな思ひに沈んだのでありますが、目がさめてからも夢だとは思へませんでした。俗に云ふ之が夢のお告げとも云ふのでせうか、私にはそれがハッキリと事實のやうな感じがしてなりません。床の中にあり乍ら、私は「今父が亡くなつたのか」としばし合掌念佛したまゝでありました。其の時、時計を見れば丁度朝の四時には十分前でした。

それから云ふものは私の心には「父が亡くなつたのだ」と云ふ感じがして、全く平生の心ではなくなりませんでした。それでも、今から起きるのはあまりに早いし、あまりに早起きでは寺にも迷惑をかけると云ふので、五時半頃までも床の中で辛抱しておりました。

朝の勤行が終つてから、弁榮上人に「上人、私は今朝夢を見ましたが、どうも父が亡くなつたやうです、私にはそれがどうも夢とは思はれません」と申しますと、上人は「さうですか」といかにも氣の毒さうな面をして十念をして下さいました。

## 三

それから云ふものは、私は全く父を亡くした感でありました。「あゝ、とうとう父も亡くなつたのか。何と云ふ悲しいつらい事だらう。私が生れて三十年、殆ど今日に至るまで、父と云ふ父に對して、何等の孝養もしないのに、父はあゝして逝つたのか。父はもう永久に此の土では遇はれない。之からは永久に手紙一本でも父には此世で出せなくなつた。昨日までは此の世に於て父と呼ばれ、子と呼ばれるの事實の身が、今日と云ふ今日からは全くそれが呼ばれない。もう私は永久に古郷に歸つて

も父に遇ふことはできぬのか。何と云ふ此の世ははかない所か。——」

かうした心で、私の心は一ぱいでした。そして私の悲しみと淋しさは殆ど無限の絶望に堪えないものでありました。過ぎ去つた昔の幼少な頃から、三十年來の今日までのことが一時に思ひ出されて、私には限りない、淋しさと悲しさと、父をば惜しむ心に一ぱいで、身心共に崩れるゝの有様でありました。

父を亡くすると云ふことはかくも悲しいものであらうか、それも無理からぬことである。たつた今まで、父よ父よと呼んでゐた父が、もう此の瞬間から永久に此の世で父よと呼ぶことができないでいか。私が悲しむのも當然である。死んで極樂に行くの淨土に參ると云つたとて、それはまだ行つても見ないことであり、よし行つて見たことがあつたとして、今かうして父と別れるのは決して嬉しうてそれが悲しみますに居られやう!

而も私の悲しみはそればかりではありませんでした。それは私の家が貧しかつたので、その中から私共の二人（一人は私の弟です）を學校にやるには一通りの困難ではなかつたのに、それに酬ゆるにと共に其の晩年を、私共二人の成功の爲めに献げてくれました。それは實に容易ならぬことでありました。それにもかゝらず私は中年にして親の願に反し、身を宗教界に投じたのであります。父は未だ本當の宗教を充分に知らなかつたにもよりますが、心から之を悲しんだのであります。而も此の爲めにそれからの父は一生を眞に樂しむことができませんでした。そして、四五年の間父は全く此の世を苦悶の中に過したのであります。晩年に於て、而も父が亡くなる一月の前、父は私に會つて、初めて私の眞意を悟り、私の郷里に於ける五日の講演に、初めて佛教の眞意義を悟り、初めて人

生の何物たるかを解することによりて、私の事業の決して只事でないことを知つてくれました。乍然それにしてもまだ父の本心は私の望むところまで喜の世界が見えたのではありません。ほんのたゞ私に對しての恨みと悲しみとがやゝとけたと云ふ位に過ぎなかつたのでありました。

それには私にも重大な責任があるのであります。天にも地にも唯一人の父ではありませんか、それをたゞい父のいたらぬ誤解からとはいへ、心から私を理解し、私を心から愛することのできるやうに私がそれを仕むけ得なかつたと云ふことは何と云ふ子として親に對する不孝者でありませう。それに私は心から親には孝を盡し、君には忠を盡すべきだと自ら信じて居る一人でありましたのに、それを充分に父にも知らせ、それを充分に父にも受けて頂きたかつたのでありますものを、而もそのことがなくして、今や永久に再び此の世ではまたと見ゆることのできないとは、私にとつて、世に之ほどの悲しみがどこにありませう。私が之を思ふて慟泣したのも亦無理からぬことでありませう。

## 四

それからと云ふものは暫くの間、私は他人の死もさまで同情し得なくなりました。それはその人に對して、あまりに同情のないやり方のやうでありますが、「私の悲しみがあまりに大きい爲めに他人の死に對して、同情する餘裕さへ無くなつたのかと思はれます。

乍然かくの如き悲しみも、之また「父を亡くした其の子の体験として、父が其の身を以つて、之をその子に示す最後の教訓か」と思ふとき、「自分の親でなくては誰でもが興えることのできない此の絶大なる教訓」と父の最後の賜として、私は之をいかばかり感謝したか判りません。

而もそればかりではありません。それからと云ふものは私は他人の死に對しても、更に深刻な同情を感じるやうになりました。而も私はその同情が自分の父を亡くしたときの悲しみに比べて、甚だ薄

きを思ふとき、私は其の人に對して、相すまぬとさへ感ずることが多いのであります。そして、今ではその爲めに、人に對する用いの詞さへ録に出せなくなりました。それはどんなに書いても私の言葉はそれを万分の一も表はすことができぬからであります。

乍然それと同時に、私には又一つの力づよい何ものかと興へられたのを感じずにはゐられません。それはかねてから、私の父が曲りなりにも御佛を信する信仰の人であつたと云ふことであります。尤も、其の信仰の形式と内容とは私共當時の青年の信仰に比べて、甚だあき足らぬものゝ多かつたことは云ふまでもありませんが、それでも父は毎日、日課一万遍の念佛の信者であつたことであつた、尤も父は青年の頃から、他の人に比ぶれば熱心な宗教信者の一人でありました、乍然それは世に云ふ弘法様の信者であり、現世祈りの信仰でありました。そして、そのかたわらには、觀音様も信すれば不動様も信するし、地藏様も信するといふ風で、神様としては氏神の八幡様はもとより、どうしたわけか金比羅様の熱心な信者でもありました。

然に私が念佛の信仰には入り、身を淨土宗に置くに至りましてからはそこが親の情と云ふものでありませう。父は知らず知らずの間に私の言葉に従つて、其の晩年には主として専修念佛の行者となつたのであります。だから、父が愈々命終の時に望んで、いとも安かに念佛裡中に眠むるが如く息引きとつたと云ふことは私の喜びに堪えぬ所でありました。

それと、今一つは愈々父が亡くなつたと云ふことについて、私の責任が一つ減じて、それだけ道の爲めに専心盡すことができると思はれたことであります。殊に此の感はその翌年、母が此の世を去られたときに、一層深く感じたことであります。今までは肉親の老体が此の世にある限り、やつぱり之に心配をかけまいとする私の心はそれだけ此の世に於て、両親を思ふ心がかかりがあり、又それだけ重い責任感があつたのであります。父の死によつて、其の責任が半減せられ、それだけ愈々之から

だと云ふ氣になれたことであります。

## 五

静に思へば今や父去つて十三年、月日は夢の如くに過ぎたのであります。而も、私の眞に爲し得たもの、果して幾何でありませう。思へば懺愧の至りであります。

乍然それからの十三年、又回顧し來れば幾多の事件がありました。而て、其の歳の秋、私は初めて今の妻を知りその翌歳は母を亡い、九年二月には妻を娶り、暮に上人を亡くしました。それから長女美智子が生れ、老師(中島)が亡くなり、良子、光道が生れたのであります。

而て、此の間幾多の道友も集り、又幾多の道友も散りました。乍然静に眼をつむりて、既往を考察しますれば、未だ一としてそれらが私の爲めならぬはないのであります。在るものは存るがまゝに、亡きものは亡きがまゝに、一切が嚴然として、昔のまゝに、私の心の中に生き働いてゐるのであります。その中でも、またと得難い父の姿よ、母の姿よ、私はいつもかうして、くりかへし、巻きかへし、永遠より永遠に、過し昔の一切をくりかへしては其の宏恩を感謝するのであります。否、それは單なる感謝ばかりではありません、あのあたゝかい父の姿と、あのあたゝかい母の心と、その姿とは今も尙私をして、常に慰め、常に導いてくれるものがあるのを拜受してゐるのであります。合掌。(四、五、二四、午後二時遊にて)

## 別時三昧會に就ての希望

中 村 辨 康

光明主義の別時三昧會と云ふものが行はれ初めかけてからもう十二年位になる相です。

然し之れに依つて本當に養はれて來た人がどの位あつたかと云ふ点に就て深く沈思して見ると本當に淋しい氣持になります。

少し功を経て來ると皆な獨斷論の中に墮ちて行く様です。イヤ人事ではありません。之は私達自らの警告なのです。

此の事實は進歩であるかも知れませんが實は恐ろしい毒蛇の口でもあるのです。

一体に私達人間は皆な自惚れに過ぎて居ります。少くとも「我れ信仰あり」と考へる様になると高上りして來ます。ジツと胸に手を當て、考へて見て下さい。本當の事です。

もつと反省させよう。

反省しなければ伸展はありませんよ。

反省がなくなると眞剣な氣持がにぶつて参ります。

最近の事は知りませんが、己前によく三昧會の度毎に

痛切に感じさせられた者です。

夫れは集つて居る人の半分迄は雑談に身を入れて居ると云ふ事でした。

丁度私達は塞の河原に來て居るのではないかと思つた事でした。

折角一生懸命になつて築き上げた敬虔な塔は休憩時の雑談と云ふ鬼の爲めに突崩されて仕舞ふのです。

皆んな話好きだからいけないのです。皆なうはついて居ました。

而して皆んな眼が光つて居ました。

幾分は重い空氣もありましたが一体に浮動勝でした。

一方に涙を出して泣いて居る人があるかと思ふと一方には大聲出して笑つて居る人がありました。

涙も笑ひもみんないけません。喜ぶのもまだ早いです。安心するのもまだ早いです。

まだ上調子だからです。

本當は講話も無い方がよいのです。朝と午前と午後と夜と毎回三時間位づゝ口稱三昧にいそしんで三度の食事

の時丈休む事にしたいと思ひます。

衆愚におもねる必要はありません。横着な氣持に引き

づられる義務はありません。質問したい事があつたら食後の時間を利用すればよい

ではありませんか。

而して同行の間には成る可く話かける事をやめて指導者一人丈を中心に聞いたり語つたりして行く可きです。

同行間の話は先入觀念を構成して却て邪魔をなすもの

です。寧ろ嚴禁して仕舞ひたいものだと思ひます。

休憩の時も食事の時も念佛を止めてはいけません。御茶も御飯も烟草も南無阿彌陀佛と囃み南無阿彌陀佛と吞

めばよいでせう。

とにかく一週間の間は念佛以外は無言の行をやるつもりで居たいと思ひます。而して起居進退も少し重々しい

位に落着いた態度で動作したいと思ひます。

本當に如來様と自分が一つである此嚴肅な事實を體驗せんとする神聖な集りをわれ人共に一種のニューモアな

道樂氣分で打ちこわすと云ふ事は遺憾此上もない事です。

私達にはまだ本當にふざけた氣持がぬけ切らないで居

ます。それもいゝでせう。然し眞劍なる可き時には眞劍

でありたいと思ひます。

## 生存の意義

石 黒 武 夫

此の度の講演會は私にとり近頃になく愉快なものであつた。暫く先生にお會ひ出来ないものと決めてゐたゞけにお會ひ出来た喜びと、やゝもすると信仰の進歩を妨げんとする恐ろしいものを一氣に心の中から押し出してカ

ラリとした晴天のやうな氣になつたのである。

是はいつものことであるが先生からお話を聞いてゐる間は次から次へと感想が浮ぶが、しまいには何にもかも

一つになり混線してわからなくなつてくるのである。そ

れで私は時間のたつのを待つて頭を整理して靜かに先生の御言葉を思ひ浮かべては考へて見ることにしてゐる。

私の生活の中には常に先生のお聲がひびいてゐる。そ

でない私は淋して仕方がない。

私は今度のお話について一、二つ書いて見やうと思

ふ。

「生存の意義」今時の人達の口の先に常に上る言葉である。曰く、パンの爲めに、生きるのか。曰く、生きる爲

めに働くのか。働くために生きてゐるのか。私がかつてこ

皆んなの笑ひにつれられて大笑ひの仲間入りをするならば夫は本當に自らの不眞面目さを物語るものではないでせうか。

本年も唐澤の別時が七月の廿二日から行はれる三か承りました。一生に一度しかない別時だと思つて一生懸命にやつて下さい。

眞劍になつてやつて下さい。

形式は例年の通りであらふと存じますが、眞劍な氣分は御互にこはさない様に祈り合つて行かふではありませんか。

私達はいつでも敬虔な求道者でありたいと思ひます。

イヤ私達は永遠に眞面目な旅人なのです。

眞劍になりませう。モツト眞劍になりませう。而して常に反省を怠らないで行きませう。

日常生活の中にも。

職業の中にも。

別時三昧の中にも。

眞劍に如來様を念じて行きませう。

淨佛國土 成就衆生

此の本當の願こそはふざけた氣持で契ふ譯はありませんものね。

本當に御願ひします。

の時私は斯く云つた。「私達はパンの爲めに働くのか又パンの爲めに生きるのかさうかは知らぬが飯を喰つて生きてゐることは事實である。そこで壽命の問題はこの事實の上に横はつてゐるものと考へる。而して吾々には生存の意義が第一に研究されねばならぬと思ふ」。私は人生は先づ生存の意義が明白にならざる中は決して正しき人生を得ることが出来ないと考へてゐたのであつたが此の度のお話により夫が一層深くはつきりした。

「生存の意義は死を自覺することにより尙確的になる。何時死んでもよいと云ふことは決して單に生きてゐることがいやであるからと云ふやうなものでないことを知つた。

生物として生を望まないものがあるであらうか。生物であるが故に死ぬるのだ。死ぬるが故に生物にとり生は一刻も忽せに出来ない程貴重なものとなつてくる。こゝにも「生存の意義」がひらめく。

生の自覺として生存の意義があり、死の自覺として生命の不滅を知る。此の二つの自覺は二にして一つであり

一つとなる處に永生の榮光が輝く。然り而て永生の榮光こそ生存をしてかくも意義あらしめてくるのではなからうか。

思ひ一度こゝに至る時、明かに如來と俱なる生活を知り、パンの問題、何んの爲めに働くか等の問題は何處かにフツ飛んでしまふ。

「やらすにゐられぬ」境地とはこゝではあるまいか。聖人君子とは此の自覺の中に生きてゐる人達を指すなら凡人の生活とは紙の表裏である差を發見する。

喰はんために働く人は喰ふことが苦しい。働くために喰はんとする人はその上である。働くため

## 遇 感 一 二 一

土 屋 觀 道

### ○一時の都合

世の多くの人々は、たゞこれ私利と私慾の人のみである。だから、自分さへよければ何でもよいと云ふ人が多

す。従つて、自分に都合よしと思はれるものゝみが其の人に好まれて、自分に都合悪しと思はれるものゝみがいつ

にパンがよほさうまいと思ふ。

働くにゐられぬ人は更にその上であり喰はずにゐられぬ程にパンがうまいと思ふ。

生存の意義を知らずして生きようとしがみついてゐる人は生きるこゝが苦しい。死を恐れ生を享樂せんとする傾向をもつ。

然らずして意義を眞に知るものは能く生を喜び、死を一機轉として更に偉大なる世界に生きんとして、これが理想發現の爲めにはあらゆる努力を試みんとして活動してゐる。「悔なき生活」である。これこそ望ましき價值ある生活ではあるまいか。(四、五、一七)

も其の人から遠ざけられるのだ。

乍然、後から考へると事必ずしもさうとばかりは行かぬ。中にはよいと思つたことが悪つたり、悪いと思つたことがよかつたり、あべこべな場合がある。殊にそれが自分の修養に於て最も多い。「艱難汝を玉にす」とか、「可愛い子には旅をさせよ」とか昔から言はれてゐるの

は此のことであらう。

### ○生きた人生

眞に生きるとは其の實、道の爲めに死することだ。だから死ぬのが惜しい位の人に本當の仕事はできるものでない。そしてまた、道の爲めに死ぬることが、即ち眞に生きることはないか。

自分の私利と私慾とを捨て、道の爲めに此の身を献ぐることは、自分がその爲めに死ぬることである。従つて、それが何となく損でもするやうな感じもするが、それは自らが本當にそのことを知らぬからだ、其の實道に死ぬると云ふことと道に生きるると云ふことは同じである。道に死ぬると云ふことはその道の爲めに此の身を献げることであるが、精神的にはそれが本當に生きることになるのだ。

### ○數學の眞理

數學の眞理に従はずして、さうして數學の問題がとけませう。だから眞の數學者は數の眞理に従ふて、初めて數に於て自在を得る。

それと同じく、人間の生活もその道に従つて、初めて人間の自由があります。然る世の多くの人々は自ら眞に生きんとして、反て偽惡の生活につかうとする。乍然それは恰も數學の問題を數の眞理によらずして之を解くの

と同じである。さうして眞に生きることができませう。(四、五、一九)

### ○道を聞くもの

同じ道を求むる人にも亦色々の種類がある。道は一なりと云へばとて、それが形式に捕はれてはいけない。「柳は縁に花は紅なり」と云へばとて、縁ならざる柳もあれば、紅ならざる花もあり得る。それをたゞ一つの言葉に捕はれて動きのとれぬと云ふことは未だ眞に道を聞くの人とは云へない。而もいつまでも自分の私慾をのみ中心として、話の選り食いをする人はさ始末におえぬものはない。

牛が草を食へば牛となり、馬が草を食へば馬となる。然らば牛馬にも近い根性で道を聞くもの、牛馬にも等しいものとなり終るのも亦當然ではないか。道を聞くもの注意せよ!

### ○新 生

「汝等新に生れずば神の國に入るこゝ能はず」とキリストは言つた。道を聞く人の味ふべき言葉である。「汝自身を知れ」とソクラテスも云つてゐる。犬のやうな根性や猫のやうな根性ではいかに道を聞いてもだめではないか。

凡そ眞に道を聞かんもの先づ自らの魂から入れかへぬ



ばならない。少くとも先づ自身の我慾を止めて眞に道を聞く覺悟でなくてはならない。

○一が一切

一を貫くものは一切を聞くのだ、何でもよいから一を聞いたなら、その一を貫くことだ。少くともその一によつて一生を貫くべく自己の心に徹するまで、其の道につくべきである。

眞の教とは此の一を貫くの教へだ、一の外に二はない。一が即ち一切だ。

然るに世人は此の一を知らずして、徒に數の多くを知らうとする。そこにすべての誤りがある。

○眞の態度

世には人の話を聞いて、それを其の人に訂しもせず、これをあしざまに又人に語る人がある。乍然かくの如きは眞に道を求むる人の正しき態度ではない。少くとも共に道を求め道を語る人ならば先づ他に云ふ前に、其の説を其の人に問い訂すべきである。

○人の噂さ

又世には人の話や噂を聞いて、輕々しく其の人を離れやうとする人がある。乍然それも亦まちがつたやり方ではないか。若し其の人にして今少しく其の人を信じ、其

の人と共ならば何故に其の人はそれを其の人に聞いたゞしてくれぬであらう。

而もそれが事實であり、又とるに足らないものであつたにしても、必ずしも私達は直にそれを捨つべきではない。袖ふり合も多少の縁と古人も云つてゐる、まして、五年も十年もの道友であるならばそれをどこまでも正してやるのが即ち友としての道ではないか。

それを充分に調べもせず、僅かばかりの自己の利害から直に之を捨つるのはあまりになさけない話である。

○佛魔一境

世に佛魔一境と云ふことがある。惡魔ほぎよく佛に似てゐるものはない。之は一体何を意味してのことだらう。

眞の教はたゞ私共を喜ばすれば足ると云ふべきものではない。だゞこのまゝに喜ぶのみならばそれは決して眞實の教ではないのである。

従て、私共の眞に聞くべき佛教は少くとも常に私共をして眞實の道に精進せしむるものでなくてはならない。

佛魔の境は實に此の一境にあるのである。(四、五、二〇)

吾朋便り

○福岡文理科大学 田中行雄様より

拜啓 初夏の時先生にはその後御變りは御座あませんか。

先日は黒宮翁の御宅にてはからずも始めて拜眉の榮を得その後一週目近くも御伴させて頂き種々御懇篤なる御教賜り且つ就職問題さへ御斡旋下さいまして御厚情誠に身にもみて有り難く謹んで幾重にも御禮申上げます。

御座様に沈鬱寂寥の心に一道の光明と力を得ました。只此の頃漸く求道の旅を踏み初めた昏迷の鈍劣兒ですから今後絶えざる御教導と御鞭撻を愈々仰がればなりません。

名古屋大阪何れに於ても諸先輩に御會ひ致すことが出来、一方ならぬ御世話になると共に實人生の体験上の御話種々拜聽することが出来まして何れも有りがたく感銘致しました。

當地に參つてから聽講の準備、先生友人の訪問等に匆忙の日を送つて参りましたが農村問題、農業經濟問題、移民問題等は思想的見地において商工業との關連に於て國策の見地に於て何れも研究の心を刺戟されます。而して研究は止み難き、憂國愛民の情熱からするでなければ机上の學論の遊戯に墮しはせぬかと存じます。

而してこの感激は宇宙生命に徹透する信仰に於て始めて純粹正大なるべく、かくて私に於て深き信仰の獲得は何より第一の根本に思はれます。大いなる力。生々躍動の力を全身にみなぎらしつ、働ける日はいつか。

教へられました通りつ、しみて如來の前に敬拜し昏倒するまで働く外はないでせう。

功利さ虚榮にくらんだ愚味な且つ極めて薄弱な者ではありませんが尙ほ一片歌々の志消え失せぬ様にも見えます。外面の生活は何にてもあれ人道の戦士として祖國防護の一員としての魂の成長を内に祈念します。

先生の御高教と御鞭撻を切に祈上ぐる次第です。敬白

○津島健清様より

南無阿彌陀佛

御上人様には其後御恙無く各地御巡教被遊閑靜なる山境にて御精進遊ばされ候由慶賀之至に奉存候降つて私宅一同お蔭様にて無事消光龍在候間乍憚御体神被下度候

扱て過日別時念佛三昧會相催し候節は御繁忙の御中を御割愛下され親しく御指導を蒙り候段有難く御禮申上候 各地より御參加下され候道友皆々様にも格別熱心に御精進下されお蔭を以て意想外の盛況裡に奉修させて頂き申候事はれ偏に御上人様の熱烈なる御指導に依る賜と家内一同深く感銘罷在候

今後一歩宛たりとも向上任り度努力致す一同の存念に御座候間不相變御教示仰ぎ度切に御願ひ申上候。先は右延引乍ら御禮申述度如斯に御座候 敬具

○越後 原哲郎様より

南無阿彌陀佛

久方振りに御來柏下さいまして、一同

大喜びでありました。近來ゆるみ切つた私の身に心も亦々緊張味を加えさせて頂きました事を深く御禮申し上げます。御講演の数々、黒丸先生の御言葉では無いですが、一時押えの注射の針をさされる様でなく、鋭いメスでグサグサ外科手術をして頂いた様で苦痛の気分の中にも病源を取り除かれた、何とも云へぬ快感を覚えさせて頂きました。

反省―悔悟―歡喜―奮起……こうした順序に依つて生れ出づる生活こそ最も力強い、ドツシリと落付いた活動が出来るのかと思へまする。眞實限り無き御佛の御慈悲に合掌せずには居られませぬ。念佛精進―職業に奮勵―私の前途は光明に照らされて居ります。

心から御慕ひ申した多數の者に御分かれになり今頃は定めし御宅の事、亦は各地道友の事など御思ひ出しになつて居らる、事さ御推察申し上げます。旅の夕暮は殊にそうした事が思ひ出せる様に私には思はれますので、然し御静かに御勉強なさるには亦御都合が御宜しい事と存じます。

どうぞ朝夕はまだ御寒い事と思はれます。御身体だけは御大切に願ひます。では之れで筆を止めさせていただきます。合掌

▽土屋親道

○本年の四月の行基寺の別時會はあまりに久々の爲めであつたのが、各地からの集りも實に近年にない多くの集りでありました。それと同時に私も今度こそは久々のことでもあり、又全部をその爲めに献げたいと云ふ氣で一パイであつたので、近來にない全力の生活でありました。○之も偏へに當住職並に其の奥様を始め係りの方々が専心の厚意によることばもとまり、また集つた道友の近來にない眞剣な精進ぶりも、深く任つて力があつたと云はればなりません。

○それに今年新しい人が多かつたのと又地方寺院の方が多數入れかはり隨喜して頂いたことも全く近來にないでございでありました。之も主として感謝すべきの一つであります。

○次に五月は四日まで東京にゐましたが五日の朝になつて寮を出ました。それは

佐屋の黒宮氏の三昧會に隨喜する爲めでありました。とても今年に行けなと思ひ切つて居りましたが、愈々となつて見れば八年もつゞく黒宮氏の御熱心と各地から集られたであらうと思はれる道友のこゝろを思ふとじつとこゝろではあらはれませんでした。そこで色々考へたすえ、せめてもの事にあの三日間なりと突然にも東京の家を出たのであります。

○乍然佐屋に行つて見れば集る人は少なかつたがその黒宮氏一家の喜びと、道友の樂しさは又格別でありました。私には成べく勉強のできるやうに特に自由を與へられたのであります。折角、わざと來たことでもあり、又僅かに三日と云ふことでも私の全力を別時の爲めに献げてしまいました。

○それについて、こゝまで來たからと云ふので、之も永く前へからの願ひもあつたので、大阪と越後へも廻つて歸る事にしたのでした。然に大阪は主として土曜日曜でない、其の集りが悪いので、それまで、四日市から津の方へ廻つて行かうとしたのでした。津島のかき清さんの

こゝろで、丁度三昧會があることになつてゐたので、それに出ることになりました。

○然にこゝでは二日の豫定があまりに道友の熱心なご當家御一同の厚意のあまり、遂に三日間となつてしまつたのであります。各地の道友もわざ／＼集りその樂しさといつたらそれこそ非常なものでありました。

○それから、十一、二と二日間を大阪に行きました。幸黒宮氏も同道でありました。晝間は天手に本あさり、夜は豊田氏の集りでありました。翌日は長圓寺、心からなる集りで私は涙も流る、嬉さです。何と云ふくつるいだ集りでせう。別に云ふことは一つもなく、ただかうして集つてゐるのみでも已に限りない向上の生活を知るものであります。

○午後は四時から有志の士と生駒山に登りました。ケーナルカーで登るのですが目も回るほど高いには驚きました。丁度天氣の晴れ渡り、中春の候まで限りもない四方の眺めであります。道友の睦みは又格別であります。

○夜は十時何分で梅田から柏崎に立ちました。彼地についたのは十三日の午前十一時であります。二十名許りの道友に迎えられ、先づ原様の御宅に入りました。丸で實家にも歸つた心持です。

○此の地は昨年の九月以來、初めてのことでありましたので、道友の待つて頂いたことも一通りではありませんでした。乍然それも私の勉強を妨げないやうにござつて、わざ／＼夜だけの集りにしてくれてあります。何にから何までたゞ感謝の外はありませぬ。

○かくて三日の集りはたゞ夜間だけではありませんでしたがその眞光寺の集りはいつも満場の集りでした。晝一間は何をなしたか、あまりの嬉しさに今は忘れてしまひました。四日目の晝は四五十人の同志が運動會をやらうと云ふので鯉波の方へ行くとことになりました。合に、其の日は雨でありましたが、それが反つて終日の遊びに結構でありました。實に限りない喜びでありました。

○之は一寸云ひ落したところであるが、先月の行基寺の歸りにも名古屋に寄つたこ

き、彼地の道友で一日を遊山にござりましたが、集まるもの五六十、眞に限りない喜びの集ひでした。人は遊ぶのみが能ではないが、時にかうした野外の集りは又ひとしほの修養であるのであります。

○十七日は何をして暮したか之またしかさ覚えませんが、十八日には愈々柏崎を立ちました。そして此の地に來たのであります。

○此の地は澁の温泉寺、信州の山の中、長野の善光寺から電車で一時間許りの山奥であります。或る禪宗の山寺ですが、其の景色のよいの静なので私の勉強には非常に氣に入つたところでありました。それに入費も殆どかゝらぬと思ふ存分に入湯の出来ることは全く恵まれた天地であります。

○昨年も僅かばかりではありましたが、此の地が一番勉強もできましたので今度も亦かうして歸途を利用して此の地に留つてゐるのであります。もとより之と云つて自分で勉強したなど云い得べきほどでもありませんが、極く此の閑静な二階に於て思ふ存分に讀書もせられ、又書く

ことのできるのには限りない私の喜びであり  
ます。

○気が向かわば今でも歸へれる身であり  
ますが、気が向けばいつでも居られる所

であります。でも今暫くは尙此の寺に居  
ることでありませう。(四、五、二十八、  
澁、温泉寺にて)

### 唐澤別時三昧會案内

一、日 時 七月二十二日より二十八日迄七日間

一、場所 長野縣上諏訪町唐澤山阿彌陀寺

前日午後五時頃までに上諏訪驛前旅館湖月館に待合せます

謹告 五月號は休刊いたしましたどうぞ悪しからず

### 誌代拂込御芳名

- 壹圓 名古屋杉本藤蒸様、大阪大和清次郎様、阪井源吉様、三重稻本悦三様、大垣高岡せい様、岐阜岡崎真吉様、岐阜佐分利良吉様、福岡寺澤精兒様、三重久保田領太郎様、岐阜野口新太郎様、横山たけの様、北海道富澤矯様、小彈正新吾様、愛知桑田駒吉様、大羽藤太郎様、新潟北原藤平様、柏崎柴野甚次郎様、全小泉きゆみ様、全大島正春様、全村山みづ様、全大島起代治様、東京白江やす様、兵庫小林信也様
- 六拾錢 中川靜子様、滋賀成瀬宏忍様
- 貳圓 大阪伏本保太郎様、大阪清水恒三郎様、岐阜所さも子様
- 參圓 大阪上田重子様、東京入澤敏子様
- 五圓 京都福住周學様、大垣桑原省三様
- 七圓 福岡光樹寺様
- 八圓 岐阜古川仲行衛門様
- 拾圓 眞松院様、新潟岩田屯様

八、〇九

(大正十四年八月十三日) 昭 and 四年六月十二日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第八卷 第五號  
第三種郵便物認可 昭和四年六月十二日發行

定價誌本	注文の注意
一部 金 十 錢 郵税共 半年 金 六 十 錢 全 一ケ年 金 一 圓 全	講讀希望者は代金を添へて御申込下さい 誌代は總て前金御拂込の事 送金は振替によるのが便利 です

昭和四年六月 十日印刷納本  
昭和四年六月十二日發行 行

東京市芝區芝公園十四號地九番  
編輯兼 土屋 觀 道  
發行人

名古屋市中區隅田町二一番地  
印刷人 百々治之助  
電話西(6)二九三番

名古屋市中區劍屋町二丁目  
印刷所 藤田山田活版印刷所  
電話東(4)〇六三・七五五

東京市芝區芝公園十四號地九番  
發行所 眞 生 社  
振替口座東京四七二八八番